

やっぱり「紙の年賀状」がいい！！

師走のあわたしきのなか、なんとなく追いたてられる感じとなるものが年賀状書きです。「元旦に配達されるためには、12月××日までに投函してください」との呼びかけに、“急がねば”なんて気分になってくるのです。



そんな年賀状のやりとりについて、先ごろ、高校の同期仲間のメール網で「紙の年賀状はやめて、メール交換にしよう」との意見が一人から提起されました。「毎年、書くのが大変」「紙資源の節約にもなり、エコライフにも通ずるし」と何人かの賛同意見も出てきました。今のところ反論は見られませんが、敢えて意見を述べなくても“自分は自分なりの方法で”と思っている人が大部分なのでしょう。私も意見発信はしていませんが、この随想がその集約です。

結論は「やっぱりメールよりも『紙の年賀状』がいい！」。日本の正月気分をより深く味わえるからです。ドサッと郵便受けに入った、輪ゴムで束ねられた賀状を部屋に持ち込み、コタツでみかんを口に入れながら1枚1枚に目を通していく。ゆったりとした、正月ならではの楽しみでしょう。

前年に結婚したカップルからは、結婚式または新婚旅行の写真の入った賀状、翌年には二世の写真が中心になっていることが多いですね。昔の友人の文面に近況報告が入っていれば「あいつも元気にやっているナ」とその面影も浮かんできます。

残念なのは、せっかく一年ぶりの便りなのに、型どおりの印刷された文言のみで、本人の添え書きもない賀状があることです。これだと、差出人の名前確認のみで、仮に100枚の賀状でも10分ほどで目を通し終わってしまいます。紙からメールへの話しよりも、まずは「虚礼廃止」の論議から始めなくてはいけないかもしれません。私自身は、「これって、しきたりに反するのでしょうか？」と2007年1月の随想でも触れたように、せっかくの機会なので、少々長くなっても近況や考えていることを伝えられる賀状に、といつも思っているところです。



もうひとつ。12月には「喪中のため新年のあいさつを遠慮させていただきます」とのハガキが届きます。「喪中」は明治時代に作られた「忌服規定」が基準になっていて、両親は1年、兄弟など2親等は3ヵ月。賀状欠礼のハガキを出す範囲は、故人から2親等までの親族、または故人と同居していた場合など、とのこと。

こうしたなか、欠礼の挨拶が来ないので年賀状を出してしまったり、出さなかった方から年賀状が届いて恐縮することもあります。思うに、身内の不幸を知っていれば、賀状を出すのを遠慮するとしても、関係のない第三者は、仮に賀状を出してもあまりこだわる必要はないのではないのでしょうか。知っていれば、弔意を含めた激励の言葉などの入った、温かいぬくもりの賀状が、却って遺族の励ましになるのでは、などとも思うのです。これって、また「しきたりに反する“暴論”」なのではないでしょうか？